

以下は、アビリンピックおおさか 2024 における競技課題の様子を知る  
ために参考として公開するものです。  
実際の課題ではありませんのでご注意ください。

## パソコンデータ入力競技参考課題 課題3 説明書

### 課題3：文書修正

#### 1. この競技の目的

- ① パソコンの画面の文書を、見本と同じ文書に修正します。
- ② ワードの機能で赤や緑の波線がついている箇所がありますが、波線以外にも修正箇所があります。一つずつ注意深く正確に修正してください。

#### 2. 文書修正に必要な詳しい指示

- ① はじめに練習を行います。
- ② (見本) の赤線までの部分と、パソコン画面を見比べましょう。
- ③ (見本) では、メインとありますが、パソコン画面ではメニューとなっています。
- ④ パソコン画面の「サブ」を消して、「メイン」を入力して入力しましょう。
- ⑤ できた方は、手を挙げてください。審査委員が確認に行きます。
- ⑥ それでは、今から競技を始めます。競技時間は30分です。
- ⑦ 競技中は、段落ごとに上書き保存をして、トラブルがあった時にも対応できるようにしましょう。

国際アビリンピックは、ツインメッセ静岡（静岡市）をメイン会場として 開催しました。また、市内 3 会場でサテライト展示を開催し、各会場では選手・関係者、来場者の方々など、誰もが安全・安心して利用できる様に、ユニバーサルデザインを導入しました。

競技 1 日目の朝、各国・地域の選手たちは集合時間に合わせ、続々と会場入りしました。一部選手・関係者の到着が遅れ、競技に関するスケジュールを 30 分繰り下げましたが、大きな混乱もなく午前 9 時 30 分、競技が開始されました。午前 10 時に、今大会の名誉総裁である皇太子殿下が競技会場に御到着され、フラワーアレンジメントや刺繍等の全競技及び IA2007 ワークフェア（デモンストレーション・展示）を御視察されました。会場では手を振る来場者に笑顔でお応えになるなど和やかな雰囲気でした。

競技初日は全 11 種目が実施され、各選手が課題に真剣に取り組む様子や卓越した技能によって生み出される完成度の高い作品が、来場者の目を引きつけていました。競技が終了した各会場では、審査員が選手の作品を細部にわたって審査・採点し、評価の作業は夜遅くまで続けました。

競技 2 日目の午前 9 時過ぎには、前日の競技結果を待つ人々で掲示板前には人だかりができていました。結果が発表されると、集まった選手や関係者からは大きな歓声が上がり、入賞を喜ぶ人、入賞できずに悔しがる人など様々でしたが、参加した選手は皆、晴々とした表情でした。

競技会場では、多くの来場者が見守る中、午前 9 時から競技が始められました。2 日目は電子回路接続やパソコン組立など、全 9 種目が実施されました。会場内の人や景色を撮影する写真撮影競技では、他競技の選手も被写体とされ、少し照れ臭そうな表情や作品制作に集中するひたむきな姿が写真として切り取られていきました。初日と同様に競技が終了した種目から順次、審査が行われ

ました。

競技 3 日目、会場の掲示板前では、前日と同様に競技結果に沸く選手・関係者の姿がありました。競技最終日となる 3 日目の競技は全 10 種目が行われ、籠製作や歯科技工、木彫といった繊細な技能が求められる競技が多くありました。また、コンピュータプログラミング競技では、選手たちが産業用ロボットを操作するプログラムの作成という新たな課題に挑戦しました。2 メートル近い大きさのロボットアームが、精密な図形をゆっくりと描いていく様子を、選手はもちろん観客も真剣な眼差しで見守っていました。競技 3 日目は、最終日ということもあり、各競技の終了を告げるアナウンスの後には、応援に駆けつけていた来場者から、ひときわ大きな拍手と歓声が上がりました。こうして、3 日間・全 30 種目の競技が終了しました。最終日の審査作業は深夜に及ぶものでしたが、すべての審査が終わった後、競技を終えた選手たちと同じように、各国・地域の審査委員もまた晴れ晴れとした表情で会場を後にしました。

「障がい者の雇用促進、ユニバーサルデザインの社会の実現」を目指して、約 190 のブースで国内外の企業・団体・国際アビリンピック派遣団などが出展しました。様々な雇用事例や実演でわかりやすく紹介され、好評を得ました。また、静岡県・静岡市は「静岡のおもてなし」として「welcome to SHIZUOKA」のブース・コーナーを展示し、観光や特産品など静岡の魅力を PR するとともに、障がいのある方による喫茶サービスコーナーを設け、来場者を温かくもてなしました。会場内に設けられた特設ステージでは、大会中の 3 日間、毎日多彩な出演者による楽しいイベントが繰り広げられ、来場者を楽しませました。

11 月 16 日、ツインメッセ静岡・北館レセプションホール等で「Good Skills, Good Job, Realizing a Society for All」をテーマに 9 か国・地域から 18 名の講演者を迎え、21 ャ国・地域から 250 名が参加して国際会議が開催されました。午前の全体会議では、ILO のデボラ・ペリー氏、アセットコーポレーションのド

ン・クロスビー氏及びキャリア株式会社の方による基調講演がありました。午後は「しごとにいきる」「はたらくことを支える」「アビリンピック出場の経験から得たもの」という3つのテーマで分科会を行い、最後に全体会議で、分科会での公演・討議状況のまとめの報告を行いました。

全体会議の基調講演において、デボラ・ペリー氏は、「障がい者雇用・訓練の国際的動向」をテーマに、障がい者の雇用や職業教育の現状について報告するとともに、実践的な戦略について紹介しました。また、ユニバーサル社会の実現には、企業・政府・NGO、障がい者等が連携するパートナーシップが大切であることなどを訴えました。

ドン・クロスビー氏は「企業ビジョンに見るアセットコーポレーションの障がい者雇用促進」というテーマで、米国での障がい者雇用の先駆的な取り組みやダイバーシティの考え方、「障がい」ではなく「能力」に焦点を当てることが重要であること等について、企業の立場から訴えました。国内の企業を代表して、坂本恵一氏は、「人権尊重による人事管理とは」をテーマに、同社の社員向けの個別相談・メンタルヘルス施策を紹介しました。

全体会議、分科会とも各講演者の示唆に富むスピーチに対して、会場の参加者からも活発な意見が寄せられ、会場が一体となって障がい者雇用の促進について考え、情報を交換し合う、非常に有意義な会になりました。

静岡市は大会期間中に、各国・地域派遣団と静岡市内小・中・特別支援学校との交流を通じて、障がい者理解・国際理解教育の推進を図るとともに、派遣団を温かくおもてなしするため、静岡フレンドシッププログラムを実施しました。

各国・地域の派遣団が交流校を訪れ、国際親善を深めたり、応援のために競技会場を訪れた児童・生徒が選手の頑張りに感銘を受ける姿も多く見られました。

また、派遣団を歓迎するため、応援メッセージを添えた花や手作りののぼりで会場を飾り、記念品として選手団全員に手作り扇子をプレゼントして大変喜ばれました。

大会参加国・地域の派遣団を対象に、日本及び静岡県をより理解していただくため、静岡の観光名所や職業リハビリテーション関連施設を巡るエクスカージョン（全8コース）を実施し、好評を得ました。

芸術祭では、「芸術・文化・国際交流」をコンセプトに「第7回国際アビリンピック芸術祭」を開催しました。「芸術祭」では障がいの有無にかかわらず芸術的分野で活躍する国内外のアーティストがピアノ演奏、伝統芸能、箏曲演奏等を行い、華やかなパフォーマンスで選手・関係者・一般来場者等（約2,200人）を魅了しました。また、火縄銃保存会による実演が行われ、会場に訪れた観客を迫力ある演出で楽しませました。

閉会式には、技能競技、I A 2 0 0 7 ワークフェア、国際会議等の参加者や招待者・一般来場者・大会関係者等約2,200人が参加しました。国際リハビリテーション協会（R I）事務総長、厚生労働大臣のあいさつの後、技能競技入賞者の表彰式や地元県知事、市長、小学生らによる各国・地域選手団への記念品贈呈、次回開催国（韓国）への大会旗引継ぎ等を行いました。表彰式では入賞した選手や国・地域の関係者が喜びを分かち合うとともに、参加した選手たちは互いの健闘を称え合うなど国際交流の場としても盛会でした。

さよならパーティーには、選手・関係者たちが参加し、大会終了の余韻にひたりながら談笑するなど、終始リラックスした雰囲気の中で行われました。当イベント中に行われたアトラクションでは、選手たちが舞台上で展開される演奏に合わせて踊り出すなど、ステージと観客が一体となって楽しむ光景が見られ、国際アビリンピックの最終イベントとして盛り上がりを見せました。

公式行事となる開会、閉会式、技能競技、国際会議やI A 2 0 0 7 ワーク

フェアなどでは、同時通訳、国際手話通訳等の専門家を配置したほか、会場内の誘導・案内担当として語学や手話などができるボランティアを多数配置しました。

開会、閉会式では大型スクリーンを設置し、ステージ上での様子を映像で提供したほか両大会の公用語のテロップ表示や国際通訳者等の通訳風景を映像で提供しました。

視覚障がい者への案内及び来場者の自立支援機器の理解を深めるため、音声コード付きのガイドブック、リーフレット等を作成し、音声コード読み取りの装置を大会会場に設置しました。また、国際アビリンピック会場では、視覚障がい者や一般来場者への案内としてラジオによる音声案内サービスを実施しました。

技能五輪国際大会では、選手は、技能五輪大会ではじめて導入された選手村（御殿場、富士、裾野）に宿泊し、相互の交流を深めました。エキスパートと技術代表は、会場までバスで30分以内の距離にある、沼津、三島、競技会場地区の17のホテルに分散して宿泊しました。公式代表とオブザーバーは、希望により品川、新横浜、熱海地区のホテルに宿泊しました。選手村の評判が高かったことは幸いであり、また、地方都市での宿泊事情にご理解をいただいたことに対して、日本組織委員会は、各メンバーに感謝を申し上げたいと思います。

国際アビリンピック派遣団は、主に静岡市内約20カ所のホテルに宿泊しました。宿泊先はバリアフリー対応であることを第一優先とし、アクセス条件、派遣団の規模に合わせた配宿、障がい種別ごとの部屋割等に配慮しました。

また、大会のユニバーサルデザイン監修担当プロデューサーである山崎氏及び静岡県の協力により、施設改善のための補助制度の活用を推進するとともに、障がい種別ごとに宿泊支援具（ドアノックセンサー、シャワーチェア等）を設

置し、選手・関係者が快適かつ安全に宿泊できるように配慮しました。

## パソコンデータ入<sup>にゅうりょくきょうぎさんこうかだい</sup>力<sup>かだい</sup>競技参考課題 課題3 パソコンの画面<sup>がめん</sup>

国際アビリンピックは、ツインメッセ静岡（静岡市）をサブ会場として開催しました。また、市内 3 会場でサテライト展示を開催し、各会場では選手・関係者、訪問者の方々など、誰もが安全・安心して利用できる様に、ユニバーサルデザインを導入しました。

競技 1 日目の朝、各国・地域の選手たちは集合時間に合わせ、続々と会場入りしました。一部選手・関係者の到着が遅れ、競技に関するスケジュールを 3 分繰り下げましたが、大きな混乱もなく午前 9 時 30 分、競技が開始されました。午前 10 時に、今大会の名誉総裁である皇太子殿下が競技会場に御到着され、フラワーアレンジメントや刺繍等の全競技及び IA2007 ワークフェア（デモンストレーション・展示）を御視察されました。競技場では手を振る来場者に笑顔でお応えになるなど和やかな雰囲気でした。

競技最終日は全 11 種目が実施され、各選手が課題に真剣に取り組む様子や卓越した技能によって生み出される完成度の低い作品が、来場者の目を引きつけていました。競技が終了した各会場では、審査員が選手の作品を細部にわたって審査・採取し、評価の作業は夜遅くまで続けました。

競技 2 日目の午前 9 時過ぎには、前日の競技結果を待つ人々で掲示板前には人だかりができていました。結果が発表されると、集まった選手や関係者からは小さな歓声が上がり、入賞を喜ぶ人、入賞できずに悔しがる人など様々でしたが、参加した選手は皆、晴々とした表情でした。

競技会場では、多くの来場者が見守る中、午前 8 時から競技が始められました。2 日目は電子回路接続やパソコン組立など、全 9 種目が実施されました。会場内の人や景色を撮影する写真撮影競技では、他競技の選手も被写体とされ、少してれ臭そうな表情や作品制作に集中するひたむきな姿が写真として切り取られていきました。初日と同様に競技が終了したものから順次、審査が行われ



ました。

競技 3 日目、会場の掲示板前では、前回と同様に競技結果に沸く選手・関係者の形がありました。競技最終日となる 3 日目の競技は全 10 種目が行われ、籠製作や歯科技工、木彫といった繊細な技能が求められる競技が多くありました。また、コンピュータプログラミング競技では、選手たちが工業用ロボットを操作するプログラムの作成という新たな課題に挑戦しました。22 メートル近い大きさのロボットアームが、精密な図形をゆっくりと描いていく様子を、選手はもちろん観客も真剣な眼差しでみ守っていました。競技 3 日目は、最終日ということもあり、各競技の終了を告げるアナウンスの後には、応援に駆けつけていた来場者から、ひときわ大きな声援と歓声が上がりました。こうして、3 日間・全 30 種目の競技が終了しました。最終日の審査作業は深夜に及ぶものでしたが、すべての審査が終わった後、競技を終えた選手たちと同じように、各国・地域の審議委員もまた晴れ晴れとした表情で会場を後にしました。

「障がい者の雇用促進、ユニバーサルデザインの社会の実態」を目指して、約 190 のブースで国際外の企業・団体・国際アビリンピック派遣員などが出展しました。様々な雇用事例や実演でわかりやすく紹介され、好評を得ました。また、静岡県・静岡市は「静岡のおもてなし」として「welcome to SHIZUOKA」のブース・コーナーを展示し、観光や名産品など静岡の魅力を PR するとともに、障がいのある方による喫茶サービスブースを設け、来場者を温かくもてなしました。会場内に設けられた特設ステージでは、大会中の 3 日間、毎日多彩な出演者による嬉しいイベントが繰り広げられ、来場者を楽しませました。

11 月 16 日、ツインメッセ福岡・北館レセプションホール等で「Good Skills, Good Job, Realizing a Society for All」をテーマに 9 か国・地域から 18 名の講演者を迎え、21 ヲ国・地域から 250 名が参加して国際会議が開催されました。午前の全体会議では、ILO のデボラ・カター氏、アセットコーポレーションのド

ン・クロスビー氏及びキャリア株式会社の方による基調講演がありました。午前は「しごとにいきる」「はたらくことを支える」「アビリンピック出場の経験から得たもの」という3つのテーマで分科会を行い、最後に全体会議で、分科会での公演・討議状況のまとめの質問を行いました。

全体会議の基調講演において、ガズラ・ペリー氏は、「障がい者雇用・訓練の国際的動向」をテーマに、障がい者の理解や職業教育の現状について報告するとともに、実践的な戦略について紹介しました。また、ユニバーサル社会の実現には、企業・政治・NGO、障がい者等が連携するパートナーシップが重要であることなどを訴えました。

ドン・クロスビー氏は「企業ビジョンに見るアセットコーポレーションの障がい者雇用促進」というテーマで、米国での障がい者雇用の先駆的な取り組みやダイバーシティの考え方、「障がい」ではなく「努力」に焦点を当てることが重要であること等について、企業の立場から訴えました。国内の企業を代表して、阪本恵一氏は、「人権尊重による人事管理とは」をテーマに、同社の社員向けの個別相談・メンタルブログ施策を紹介しました。

全体会議、分科会とも各講演者の示唆に富むスピーチに対して、会場の参加者からも活発な意見が寄せられ、会場が一致となって障がい者雇用の促進について考え、情報を交換し合う、非常に有意義な会になりました。

静岡市は大会期間中に、各国・地域派遣団と静岡市内小・中・特別支援学級との交流を通じて、障がい者理解・国際理解教育の推進を図るとともに、派遣員を温かくおもてなしするため、静岡フレンドシッププログラムを更新しました。

各国・地域の派遣員が交流校を訪れ、国際親善を深めたり、応援のために競技会場を訪れた児童・生徒が選手の頑張りに感銘を受ける目も多く見られました。

また、派遣団を歓迎するため、応援メッセージを添えた花や手作りののぼりで会場を飾り、記念物として選手団個人に手作り扇子をプレゼントして大変喜ばれました。

大会参加国・地域の派遣団を対象に、日本及び静岡県をより理解いただくため、静岡の観光名所や職業リハビリテーション関連施設をめぐるエクスカーション（全8コース）を実施し、講評を得ました。

芸術祭では、「音楽・文化・国際交流」をコンセプトに「第7回国際アビリンピック芸術祭」を開催しました。「文化祭」では障がいの有無にかかわらず芸術的分野で活躍する国内外のアーティストがピアノ演奏、伝統芸能、箏曲演奏等を行い、華やかなパフォーマンスで選手・関係者・一般来場者等（約2,200人）を魅了しました。また、火縄銃保存会による発表が行われ、会場に訪れた観客を迫力ある演技で楽しませました。

閉会式には、技能競技、I A 2 0 0 7 リーチフェア、国際会議等の参加者や招待者・一般来場者・大会関係者等約2,200人が参加しました。国際リハビリテーション協会（IR）事務総長、厚生労働大臣のあいさつの後、技能競技入賞者の表彰式や地元県知事、市長、小学生らによる各国・地域選手団への記念品贈呈、次回開催国（韓国）への大会旗引継ぎ等を行いました。表彰式では入賞した選手や国・地域の関係者が喜びを分かち合うとともに、参加した選手たちは互いの健闘を称え合うなど国際交流の場としても盛大でした。

さよならパーティーには、選手・関係者たちが参加し、競技終了の余韻にひたりながら談笑するなど、終始リラックスした雰囲気の中で行われました。当イベント中に行われたアトラクションでは、外国人たちが舞台上で展開される演奏に合わせ踊り出すなど、ステージと観客が一体となって楽しむ光景が見られ、国際アビリンピックの初回イベントとして盛り上がりを見せました。

公式行事となる開会、閉会式、技能競技、国際会議やI A 2 0 0 7 ワーク

フェアなどでは、同時通訳、国際手話通訳等の専門家を設置したほか、会場外の誘導・案内担当として語学や手話などができるボランティアを多数配置しました。

開会、閉会式では大型スクリーンを設置し、ステージ上での様子を映像で提供したほか両大会の公用車のテロップ表示や国際通訳者等の通訳景色を映像で提供しました。

視覚障がい者への案内及び来場者の自立支援機器の理解を深めるため、音声コード付きのガイドブック、リーフレット等を作家し、音声コード読み取りの装置を大会会場に設置しました。また、国際アビリンピック競技では、視覚障がい者や一般訪問者への案内としてラジオによる音声案内サービスを実施しました。

技能五輪国際大会では、選手は、技能五輪大会ではじめて導入された選手村（御殿場、富士、長野）に宿泊し、相互の交流を深めました。エキスパートと技術代表は、会場までバスで30分以内の距離にある、沼津、三島、競技会場地区の17のホテルに分散して宿泊しました。公式代表とオブザーバーは、希望により品川、新横浜、熱海地区のホテルに宿泊しました。選手村の評判が高かったことは幸いであり、また、地方都市での宿泊事情にご理解をいただいたことに対して、米国組織委員会は、個人メンバーに感謝を申し上げたいと思います。

国内アビリンピック派遣団は、主に静岡市内約20カ所のホテルに宿泊しました。宿泊先はバリアフリー対応であることを第一優先とし、アクセス条件、派遣団の規模に合わせた配宿、障がい種別ごとの部屋割等に配慮しました。

また、大会のユニバーサルデザイン監修担当者プロデューサーである山崎氏及び静岡県の協力により、施設改善のための補助制度の活用を推進するとともに、障がい種別ごとに宿泊支援道具（ドアノックセンサー、シャワーチェア等）

を設置し、選手・関係者が快適かつ安全に宿泊できるように配慮しました。